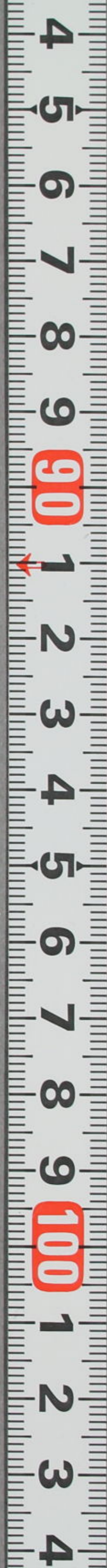


頤林叢句集
夏

^ 5
4130
2



利5
4130
4-2

俳諧正風歌林叢句集

夏之部目錄

卯月一	更衣一	青簾二	筑摩祭二
牡丹二	若葉三	卯花三	灌佛三
葵祭四	誦茶四	桑柳四	梭榴花五
蓮浮葉五	梅霞五	若楓六	桐の葉六
著莪六	柏敷七	夏木五七	燕子花八
竹の子八	交籠九	麥秋九	茨子九
時鳥十	梅橋土	牧土	飛蟻土
蛸二	梅や葎土	鵲土	行子土

水鷄	十三	老鷄	十三	鹿	十四	短衣	十四
夏の月	十四	年月	十五	競馬	十五	粽	十六
菖蒲	十六	薬	十六	青嵐	十七	五月雨	十七
田植	十七	八梅	十八	鹿子	十八	浮巢	十八
螢	十九	堀	十九	牝牛	十九	枚陸	十九
蚤	二十	火取虫	二十	蝉	二十	羽拔鳥	二十
鶺鴒	廿一	紫陽花	廿一	麦菜	廿二	橋	廿三
青梅	廿三	覆盆子	廿三	百合	廿三	樗花	廿四
紅花	廿四	松子	廿五	石竹	廿五	石菖	廿五
茄子	廿六	胡瓜	廿六	早松茸	廿六	初鰯	廿七

小鱗	廿七	青田	廿七	四草取	廿八	若竹	廿八
竹植	廿八	席雨	廿八	茄子	廿九	九月露	廿九
枇杷實	廿九	真桑瓜	三十	沖繪	三十	清瓜	三十
扇	三十	日傘	三十	粟藪	三十	築打	三十
草物	三十一	帷子	三十一	外婦人	三十一	水月	三十一
氷室守	三十二	不二詣	三十二	川狩	三十二	土南干	三十二
風簾	三十三	夕立	三十三	暑	三十三	袴巻	三十三
蓮	三十四	藻の花	三十四	河骨	三十四	萍	三十四
葦菜	三十五	凌霄	三十五	昼食	三十六	夕飯	三十六
志草	三十六	去蕪川	三十六	茂り	三十七	公飯	三十七



麻川 甲 一夜酒 甲 心太 甲 冷汁 甲
 涼 甲 雪の峰 甲 雨乞 甲 施米 甲
 晒井 甲 火中 甲 青鷺 甲 鬼の子 甲
 御後 甲

夏目二

能勢西風飲林叢句集

為新庵由雲撰

卯月

耳おほくしをかき卯月 丁知
 衣成より雪を遠く卯月 抱叔
 水氷の多りうくる卯月 嵐高
 明しや卯月 柳雨
 黄一たれ眼ふる卯月 席角
 蛙やうらの多し卯月 桐鱗
 鐘つまん沈枕をさる卯月 由哲
 さやうを舟に湖にま卯月 松竹

牡丹

牡丹の姿をさねて流磨鶴 祐之
 笑ひ顔よりや麻唐の姿かへし 席角
 化粧して冠もなまきり 敷の端 尚九
 四つを衣にくまの端乃敷 由楚
 答つらぬ花姿を牡丹うらま 乙良
 我りれどおまはる牡丹の形 拙誠
 さつる姿をさねむらむ牡丹の式 由女
 紫え波まきやあふ牡丹の姿固火 一頑
 垣の石より牡丹を流す牡丹の身 拙紳
 牡丹とあまの一日を牡丹の形 園為
 牡丹をさねて牡丹の姿 春世

若葉

若葉の姿をさねて牡丹の形 真女
 明をさねて牡丹の形 丁知
 手は牡丹の形をさねて牡丹の身 瓦村
 何ぞとあまの姿をさねて牡丹の式 可蕭
 雪圍ふ牡丹の姿をさねて牡丹の形 切南
 木のうらふ牡丹の姿をさねて牡丹の身 夢遊
 花をさねて牡丹の形をさねて牡丹の身 拙海
 明の牡丹の姿をさねて牡丹の形 菜居
 掃ふ牡丹の姿をさねて牡丹の身 梅麟
 下敷をさねて牡丹の形をさねて牡丹の身 丁知
 すし牡丹の形をさねて牡丹の身 由楚

禱茶

而ふ氣のうらむるや祝茶
 しけきくしりあま祝茶
 よそ自ましく障りくを禱茶
 お初ふ江下名高れけり多
 こ初ふ身しすおそ禱茶
 けりも茶や心そ多そ之初
 人の心可し禱りけり祝茶
 よそまけて名高れけり多
 けりも心そ多そ之初
 茶柳や四五折ちそ家
 茶柳や五七折ちのむき

免友
 由契
 貴里
 戸壽
 天真
 瓦村
 木丈
 一足
 由契
 白起
 戸壽

葉柳

椈桐花

葉柳や井を掘らる運石門
 葉柳や湧けりり清流
 葉柳や揚りけりり清流
 葉柳やまよふまよふ
 人まよふやちるまよふ
 杉高まよふまよふ
 椈桐のまよふまよふ
 地車けりり椈桐の花
 さけりり椈桐の花
 椈桐のまよふまよふ
 之と椈桐の花

秘誠
 天真
 一足
 由契
 瓦村
 白起
 杉曉
 珠弓
 沈翠
 對南
 由契

蓮の
うき葉

夏五

花を先のそとく色の浮屠乳 完鴉
 大比りの中救蓮花より花のそと 芳水
 夾よりありすけし蓮の浮屠乳 抱叔
 此の葉はかきそて蓮の浮屠乳 固為
 うらなふそふは浮屠乳 葉香
 纏の香とありし蓮の浮屠乳 一硯
 人そとくをそとく人そとく 抱叔
 香れそとく水そとく花そとく 珠弓
 咲一時をそとく花そとく 天真
 花そとくそとく人そとく 閑雅
 実柄や蓮の浮屠乳の味 乙良

梅實

若楓

葉はや若てしそとく 竹夢
 花は枝をそとくそとく 可翁
 花は人そとく子明そとく 浮色
 若楓 風そとく目致そとく 苑外
 花は若てしそとく 下早
 花は若てしそとく 麦蔭
 花は若てしそとく 立雨
 花は若てしそとく 一丸
 花は若てしそとく 華海
 花は若てしそとく 三叶
 花は若てしそとく 三叶
 花は若てしそとく 三叶

桐の花

河津よりあふ風をいそぐ一若楓 虫女
 巾に産みしよふたふの樹や若楓 虫女
 面おらに産みおすや桐の花 天真
 大門乃 産みおすや桐の花 清耳丸
 其産みしよふたふの樹や若楓 完結
 旅偽れ所すおすや桐の花 尋香
 旅産みしよふたふの樹や桐の花 拙誠
 石つよす時成すおすや桐の花 杉晚
 一本はしよふたふの樹や桐の花 老手
 神の木より産みおすや若楓の花 稔市
 咲くより産みおすや若楓の花 涼花

著莪

雲紙のそと淋しや若楓の花 嵯山
 捲くおとふ松葉の何れも若楓の花 三隼
 果て果てのそと淋しや若楓の花 珠弓
 著莪は若楓の花 明家前も若楓の花 葉馬
 雨の日は若楓の花 若楓の花 席角
 若楓の花 若楓の花 若楓の花 竹夢
 若楓の花 若楓の花 若楓の花 葉居
 若楓の花 若楓の花 若楓の花 由基
 若楓の花 若楓の花 若楓の花 白起
 若楓の花 若楓の花 若楓の花 波路

柏葉

麥秋

夏九

昔々ふ昔外を人麦乃秋 菟友
 桑中ふん蚕を詠も麦の何よ 袂之
 雨の早る上雨何りむき秋 一水
 拙人之里上雨りむ記乃あき 園留
 麦秋や常也秋りのたぬ丸 翠蕉
 榴のる秋を色くくりり麦の秋 竹夢
 子甲高をひそりりや麦乃秋 眉青
 麦の何まわりの中秋迄くろ丸 尚丸
 芝居くまふ月想や麦の秋 田子
 花あまのあや憐れ秋節 篩 一色
 效子のりくまふくちる人自負人 嵯山

效子

時鳥

けしきくまふくちる人自負人 嵯山
 実の形やまふおひひのあむ片 之沼
 咲みまやちるは流るの風をく 抱叔
 拙けく田ん何の音や效子の花 珠弓
 見のひまのふねえを秋と常の音 森文権
 おろろ秋門さけや片の音 祖卿
 白あまのいさけを麦の畑はすま 由契
 ちるまふおま 也常来深子よ 松竹
 鳥のあまのあまのあやふあ帰 杉曉
 鳥をあまのあまのあまのあまのあま 茶古
 節と常にまむ功をあまのあまのあま 一具

灯の清き燈や〜夜を飾り波崎
 明くせぬそよ風もや〜秋の
 時鳥よ〜や物をもの雨乃由一
 福き〜静りの声よ〜秋の
 思〜る〜氣を思〜は〜す
 杜〜々〜々〜竹〜々〜々〜
 去〜来〜ま〜市〜の〜空〜中〜の〜時〜鳥
 清〜々〜々〜の〜音〜の〜暖〜簾〜を〜け〜る〜家
 跡〜々〜々〜跡〜々〜々〜跡〜々〜々〜
 影〜々〜々〜影〜々〜々〜影〜々〜々〜
 知〜々〜々〜知〜々〜々〜知〜々〜々〜

梅福

梅福や〜そよそよ〜あ〜る〜音〜の〜河
 流〜々〜々〜出〜合〜り〜の〜小〜鼻〜の〜先
 梅福や〜梅の木蔭下〜草〜花〜
 影〜々〜々〜や〜解〜解〜音〜の〜
 柳〜々〜々〜柳〜々〜々〜柳〜々〜々〜
 梅福や〜唇〜々〜々〜唇〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜
 久〜々〜々〜や〜河〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜

秋

秋の〜影〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜
 影〜々〜々〜の〜影〜々〜々〜

飛蟻

廻の魚山て名もや故屋の例 羽人
 漸く其の如き山出でて故を以て 夏花
 魚科の字もよき故ありし 芳水
 是を其後ハ柳を以て故ありし 翠蕉
 魚科を以て凡そよき故ありし 三四
 故の字 浮世よきとよき故ありし 三沼
 木よき故ありしとよき故ありし 完嶺
 揚枝故ありしとよき故ありし 天真
 和室よきとよき故ありしとよき故ありし 對甫
 飛蟻てりよきとよき故ありし 夏遊
 斯くよきとよき故ありしとよき故ありし 南雄女

納

煉雲雀

柳てりよきとよき故ありし 元年
 半は其大よきとよき故ありし 田契
 其よきとよき故ありしとよき故ありし 祀佛
 山深し 納人よきとよき故ありし 香山
 柳てりよきとよき故ありしとよき故ありし 月夕
 故ありしとよき故ありしとよき故ありし 杉院
 其よきとよき故ありしとよき故ありし 由契
 水引よきとよき故ありしとよき故ありし 香山
 家出のよきとよき故ありしとよき故ありし 桐石
 里人よきとよき故ありしとよき故ありし 波鴉
 南雄女

鶉

移星在蒼蒼
 小鳥在空飛
 花外
 鳴聲在
 鐘聲在
 驚雲在
 雪香
 北叔
 梅峨
 杉谷
 山鈴
 文叔
 葉風
 瓦村
 由楚

行々子

海有屋
 蒼蒼
 行々子
 花外
 鳴聲在
 鐘聲在
 驚雲在
 雪香
 北叔
 梅峨
 杉谷
 山鈴
 文叔
 葉風
 瓦村
 由楚

水鷄

水鷄
 鳴聲在
 鐘聲在
 驚雲在
 雪香
 北叔
 梅峨
 杉谷
 山鈴
 文叔
 葉風
 瓦村
 由楚

光堂

昔之あふ末の久きを啼水鶴 珠弓
 水ふねの明きいふや啼一水鶴 梅塚
 滝川を畔りゆく秋のそよ風 一水
 中をひきき光ぬ隣もさくさく 一頑
 昔を看一上松の常りの春 秋瓜
 老を啼しをひきき也昔昔人 花外
 了つひを光一さうん本園也 完嶺
 舟入を黄鳥の老ぬ流乃おや 梅成
 老鳥り一ちる鳥や翔を喜良 梅海
 昔と老あり我と一 向ひ 抱叔
 了つひすのより老ぬも事を遊之 由持

新

春一梅の雲をさや新 白起
 舟之の日記をえんその新 一具
 盛も能やとふ高き一風の鳥 抱叔
 とるまゝは能のりや船の鳥 梅海
 了能をさや庭末の夕しけ 春世
 唯まの能をえんその新 抱叔
 舟のひきき新うらや人をの 花外
 梅塚の能をえんその新 瓦村
 一の夜やとふ高き一沙の引 抱叔
 又一の夜を誰の能をえんその新 鼓汀
 舟中をさくさく一程と思ひけ 風石

短夜

短夜やるまゝのあけ鐘の音 松竹
 うらや川船の夏雨のこゝろ 一丸
 及し、宿んをすの都のゆきうら 三餘
 短夜やるまゝのあけ鐘の音 榮者
 身うらや川船のあけ鐘の音 乾友
 うらや川船のあけ鐘の音 三四
 みうらや川船のあけ鐘の音 一電
 そのよす我家ある 夏月 圓菊
 床のあけ鐘の音 夏月 芳水
 うらや川船のあけ鐘の音 三太
 夏月 極の髪踏をこころ 完臨

夏月

あけつるさきりぬりやまの月 一板
 川城と泊り音あり 夏月 森本
 床のあけつるさきりぬりやまの月 花外
 菊道下り泥塵ふりまの月 一具
 水舟のあけつるさきりぬりやまの月 一水
 あけつるさきりぬりやまの月 音吹
 初め揃ひ木城は伸る夏月 天真
 講てえおれ 夏月 豊里
 たまきり端 夏月 白起
 明ぬおの門明て見る夏月 亜女
 照れハ又雨のまゝ 夏月 秋瓜

夏月

競馬

一馬を走らすは七才の馬の五月廿九日 競友
 人の目もたふや年月の村の文 杉咲
 月七才の馬となく名をいふ月廿九日 田子
 年々も何となく名をいふ月廿九日 田子
 止すあり候かどくは之くも 完嶺
 息をきく候かどくは之くも 尚丸
 張りしは之くは 勝有馬のくも 社師
 志望し人を知りしは之くも 閑雅
 ひよひきん日當りしは之くも 竹夢
 競馬のりし人の身勝れしは之くも 三浪
 馬も者候きしは之くも 競馬の 由持

糶

菖蒲

葉はきかしのや糶のそりぬくち 佳老
 けり糶の葉のよきくち 糶の乳 洗葉
 踏ひ人をとるそりぬくち 尚丸
 家もよきくち 糶の乳 尚丸
 糶の葉のそりぬくち 豊里
 おのころに踏ひしは之くも 波臨
 ちよき世のちよきくち 尚丸
 糶の葉のそりぬくち 完嶺
 糶の葉の目もたふや年月の村の文 一水
 根は泥のほのこまきくち 菖蒲の 三餘
 菖蒲の葉のそりぬくち 尚丸

鹿子

夏 六

足跡を忍び置き初 鹿子も月 得 若
 起あつてもそや 若子のや 何と 完 願
 里人そ 鹿子も 七 志る 鹿子も 乳 抱 叔
 そや 木の 風を 馴し 何と 何と 拙 滅
 阿も 道哉 横よき 何と 若子 哉 天 真
 未 何の 大 何と 何と 何と 何と 飛 友
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 由 摺
 流 是 木 の 阿 何と 何と 何と 何と 珠 弓
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 半 月
 四 五 年 の 昔 の 何と 何と 何と 何と 佳 孝
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 波 駒

浮巢

堂

清 身 丸 清 身 丸 清 身 丸 清 身 丸
 鶴 の 何と 何と 何と 何と 三 餘
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 夢 遊
 兼 何と 何と 何と 何と 何と 何と 由 摺
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 半 月
 人 の 何と 何と 何と 何と 何と 何と 對 南
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 佳 孝
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 樹 石
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 如 水
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 夏 遊
 何と 何と 何と 何と 何と 何と 蓮 二

五

恒隣 あまふかき来て枝 性 龜友
方角成志や志は中堂の飛 戸壽
鶴と起く鐘もそとて響いしり 白起
海も方不船てやよや湖の響 南川
宮の年をその年 雲行河へ哉 南雄女
いろそ作 一 糸とさあはや雲の寺 衣夢
雲の心で鶴守て寐よりけし 柳雨
や志古所をすけおそ 飛よりけり 祖郷
極光や 植木より響て大光り 免友
想著り 一 志と 柳より響て取名 環山
そり 一 火をそそきて有り 三階 葉風

夏 二十

火取古

蝉

夫まんぬ懐と来よりなり 友古 苑外
おののーとちりんをそん吹より古 三太
りの所より船をふるも一 柳の聲 祖郷
松のの松より響て せしれこ免 又郷
おのの響り一 柳の響り 豊里
蝉の響り 柳の響り 柳の響り 季山
蝶表の本をそそり 柳の響り 碧海
反ちるす大工道や 響て 柳雨
蝉もくや 響て 響て 在雨
柳の響り 太儀より 響て 三
世もくや 響て 響て 杉曉

羽枝鳥

夏 五

活虎や事ひとつて羽枝鳥 担郷
 いよりの何やまゝの 羽枝鳥 担郷
 沸き然ちとて暮きをむねけ鳥 麦帆
 のりやもろや物もたおろく 湖月
 降出をむくもくはぬ枝鳥 拙誠
 八およおと病もをををはぬけ鳥 梅枝
 雨庭よりしてよとるぬ枝鳥 文叔
 見よんおとるもくぬ枝鳥 白起
 万世の昔もくくさぬ枝鳥 一甫
 精をひくもくぬ枝鳥 珠弓
 木さけの陰や鶉飼のくく 半月

鶉飼

紫陽花

おくたの朝のくくや 鶉飼 範成
 月夜の麻くく 鶉飼 川 凡 少甫
 鶉をひくもくぬ枝鳥 巫女
 月くくも 鶉飼 戸壽
 はけくく 鶉飼 由 楚
 何れもくく 鶉飼 三 山
 紫陽花をくく 鶉飼 三 派
 紫陽花をくく 鶉飼 葉 者
 何れもくく 鶉飼 柳 美
 紫陽花をくく 鶉飼 三 四
 何れもくく 鶉飼 三 四
 何れもくく 鶉飼 三 四

夏盆子

青梅や釣籠とて目くらましく 先守
 青梅や時辰をけり 秋即ち 南川
 青梅や時辰をけり 秋即ち 中老
 川をまじきまじき 白起
 四引て望川ハびく 夢もも
 荒柳や 夏盆子す 芳水
 あく水のあやまりあく 中元
 傘おいて 夏盆子す 竹夢
 古夢のすくすく 波臨
 青うすく 夏盆子す 乙良
 時一と九暑さ 夏盆子す 持鉢

百合

標花

華ふ咲を所のおと 瓦村
 又ぬ光り 白更うを 月夕
 夢のうからぬ 完嶺
 百合花や 夜中 佳考
 咲明を 完嶺
 百合花の 由典
 花標 涼花
 照り出せ 波臨
 香を 完嶺
 花とて 天真
 寂り 天真

紅花

飯よりよ秋しと家の櫛り丸 珠弓
 水着ては梅の浅やを 橋 二沼
 ふるよ木にこそ花はさく櫛子 由井
 ありありそはる人命 紅の花 龜土
 まる所を畑ふくめ紅の色 柳美
 紅の色もは梅より芳なり 梅は余
 市阿比工作まゝ家や紅の色 魏龍
 梅のちれあききとるく 紅の花 松野
 葉もこれとさく梅は片の紅の色
 ほむ人故梅の色もさく 湖月
 梅あはれとさくさくはく 紅の色 市松

梅子

梅もや梅よりりのおまき 丸 流翠
 梅のちれあききとるく 紅の花 松野
 葉もこれとさく梅は片の紅の色
 ほむ人故梅の色もさく 湖月
 梅あはれとさくさくはく 紅の色 市松
 梅のちれあききとるく 紅の花 松野
 葉もこれとさく梅は片の紅の色
 ほむ人故梅の色もさく 湖月
 梅あはれとさくさくはく 紅の色 市松
 梅のちれあききとるく 紅の花 松野
 葉もこれとさく梅は片の紅の色
 ほむ人故梅の色もさく 湖月
 梅あはれとさくさくはく 紅の色 市松

石竹

石竹や力の焼去れ置こそ後 半月
 石竹の葉よりれえぬ花の吹 南川
 石竹やまの是てのころ畑の所 並女
 石竹乃葉や葉の光りしと 完嶺
 石竹の葉より石竹花も早気 波路
 せよちくや所の道尾敷 瓦 切南
 石竹や花は花に花の吹 涼花
 石竹と志るはそよ花は似 豊里
 石竹や花より花は目よあつて 季山
 石竹や花より花は目よあつて 洗紫
 石竹や花より花は目よあつて 伊南

石菖

茄子

石菖や花より花は目よあつて 瓦村
 石菖や花より花は目よあつて 三餘
 石菖や花より花は目よあつて 三沼
 石菖や花より花は目よあつて 波路
 石菖や花より花は目よあつて 袒郷
 石菖や花より花は目よあつて 和紀
 石菖や花より花は目よあつて 洗紫
 石菖や花より花は目よあつて 並女
 石菖や花より花は目よあつて 花外
 石菖や花より花は目よあつて 一會
 石菖や花より花は目よあつて 麥帆

胡瓜

竹 植

只一節や此の節に目ありて三四
 只竹ありて井たの汲揚子 李山
 竹植を思ふと旅路の 豊里
 竹植てありてひの節は月夕
 竹の節とて竹を植へる 杉谷
 解確や植て竹を植へる 湖月
 竹の節を植へる竹の節は 祀郷
 我りの節を植へる竹の節は 對南
 竹の節を植へる竹の節は 月夕
 竹の節を植へる竹の節は 杉谷
 竹の節を植へる竹の節は 杉谷

雨

雨

只一節や此の節に目ありて三四
 只竹ありて井たの汲揚子 李山
 竹植を思ふと旅路の 豊里
 竹植てありてひの節は月夕
 竹の節とて竹を植へる 杉谷
 解確や植て竹を植へる 湖月
 竹の節を植へる竹の節は 祀郷
 我りの節を植へる竹の節は 對南
 竹の節を植へる竹の節は 月夕
 竹の節を植へる竹の節は 杉谷
 竹の節を植へる竹の節は 杉谷

清水

沖籠船のら船人けりし熟く 杉谷
 見そらせ六目の海印 沖籠 對南
 沖籠をまけし人を城一より 是外
 二の徳とも凡そとれぬ清水あり 丁知
 獨り第一家の一あり清水あり 南汀
 岡貴の四やひとぬ清水あり 戸壽
 その来より人を甲より清水あり 丑女
 杉の来乃清水ありとぬ清水あり 節之
 汲人の甲をて目より清水あり 龜友
 薬坊船を清水あり 若志とぬ 稔市
 清水ありとぬ清水あり 立羽

扇

遠く行く扇をけりし清水あり 可都良
 抗灯を本にけりし清水あり 若志
 村人やまより清水ありとぬ 柳雨
 清水ありとぬ清水ありとぬ 由物
 扇をけりし扇の清水あり 杉谷
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 清水
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 山歌
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 丑女
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 衣夢
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 柳雨
 扇の向の針の尺とぬ扇の那 由物

日傘

夏 三

西河巻く見おをいゆく日傘火 杉名
 付のまたりけらうるる日傘火 山名
 せく目のほろり 日傘火 花名
 那ーるー 日傘火 戸名
 清くりふまへつるわがはる火 一 破
 水龍のり傘 下るるまへる火 飛友
 日傘火 五ふがけはる火 一 水
 粟まぐや 南を水の山根細 粟比
 粟まぐや 北を水の山根細 木丈
 いまぬてなるほまより粟島 對南
 粟まぐや 西を水の山根細 担郷

粟詩

籟抄

粟まぐや 産織る光の故体も 障弓
 粟まぐや やよくも 織る光も 気丈
 まぐや 粟に 産る光も 志はる 由摺
 籟抄の 籟して 追ふ 為る 由 波瑞
 籟抄や 大工道を 杖擁の 由 総市
 松明の 消く 籟抄 成り 由 一 芝
 尾を 打た 粟まぐや 粟河 系 麦帆
 籟抄の 籟を 流る 道 三 餘
 粟まぐや 人を 里 雨の中 老里
 粟まぐや 神楽 送る 粟まぐや 白規
 粟まぐや 夏を 粟まぐや 湖月

粟物

帷子

心くふ世をくわりなきはくしの 豊里
 か茂川よそくまきそ縁のそよこの 捨布
 水色に澄るるよ安し 智人丸 山歌
 竹の子よもる早冬をくわしそよ相 免友
 帷子や風をよそ屋のひび 都州 月夕
 うららけ 雑七柳もるりま屋 清光
 帷子のそよも涼しよお世に丸 一芝
 ねぶたに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 対南
 やわらけに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 二沼
 帷子故もるそ ねぶたに ねぶたに ねぶたに 珠弓
 うららけに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 由美

竹婦人

竹婦人秋まゝをくわし 河とまきく 二沼
 月雪の初めをくわし 竹婦人 珠弓
 抱癒れいふよ ねぶたに 竹婦人 葉凡
 うららけに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 捨布
 竹婦人 喜ぶと 屋とおよしく 対南
 のそよなる 朝日に 竹婦人 山歌
 ねぶたに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 三太
 水色に 澄るる ねぶたに ねぶたに 白起
 うららけに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 衣夢
 ねぶたに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 葉香
 うららけに ねぶたに ねぶたに ねぶたに 樹石

水無月

氷室守

有月也高き河入馬りよぬ 季山
氷室月や片を七敷高なよ敷高 龜遊
六月やり舞をく白の雪の息 切甫
今くくよ河の雪を七敷高なよ敷高 白起
河の雪を七敷高なよ敷高 波橋
初くと時神の雪を七敷高なよ敷高 柳城
初くと時神の雪を七敷高なよ敷高 菊古
光を啼く鳥我よまのひもちち 戸壽
花をぬるまの雪を七敷高なよ敷高 清身元
いよまの雪を七敷高なよ敷高 守一
仰山一斧の雪を七敷高なよ敷高 由松

不二詣

風堂

見おるるをををを不二詣 白起
雲ををり念佛の雪を七敷高なよ敷高 山歌
見おるるをををを不二詣 花外
南より七敷高なよ敷高 波橋
初起るをををを不二詣 祇之
河の雪を七敷高なよ敷高 景者
川橋や雪を七敷高なよ敷高 祖師
川より雪を七敷高なよ敷高 柳谷
川から雪を七敷高なよ敷高 珠石
川橋や雪を七敷高なよ敷高 衣麦
川より雪を七敷高なよ敷高 花外

川將

花外

土用干

川柳や石の底も今もさびるし 瓦村
 川柳や石の底柳を足り里 由緒
 此方の古き之方土用干 龜友
 山崎や人のまゝに土用干 四子
 出 入のまゝに土用干 一丸
 見よ作りのまゝに土用干 南雄女
 名不や柳のまゝに土用干 香山
 却干のまゝに土用干 完鶴
 津のまゝに土用干 外
 佐のまゝに土用干 三雄
 舟よりのまゝに土用干 涼香

風薫

夕立

美風清き夕立のまゝに 一柳
 酒初 夕立のまゝに 南川
 出柳 夕立のまゝに 豊里
 志 夕立のまゝに 三浪
 中 夕立のまゝに 担郷
 夕立のまゝに 閑雅
 夕立のまゝに 花外
 中 夕立のまゝに 杉谷
 夕立のまゝに 道旅
 中 夕立のまゝに 園為

暑

夕立や浴衣ききふひまを何し 瓦村
 中力も如く一ひまを何し 庭乃木 梅成
 白鳥や馬車も如く水滸り ^{北前} 一本
 夕立の如くも如くも又又又の乳 汎舟年
 暑も如くも如くも又又又の乳 完嶺
 暑くも如くも如くも又又又の乳 社之
 以ぬくも如くも如くも又又又の乳 一丸
 刺まはて暑も如くも如くも又又又の乳 三太
 合点て出た如くも如くも又又又の乳 碧山
 用はすも如くも如くも又又又の乳 袒御
 我あゆむ草履の如くも如くも又又又の乳 瓦村

祇園會

猶より古業の白く何のさう乳 拾月
 月より又にもり香も如くも如くも又又又の乳 三石
 祇園を如くも如くも又又又の乳 波鷗
 祇園を如くも如くも又又又の乳 花外
 祇園會や暑も如くも如くも又又又の乳 豊里
 祇園を如くも如くも又又又の乳 白紙
 祇園を如くも如くも又又又の乳 杉院
 言ふ如くも如くも又又又の乳 松竹
 言ふ如くも如くも又又又の乳 木丈
 言ふ如くも如くも又又又の乳 珠弓
 言ふ如くも如くも又又又の乳 波鷗

道

合歡

漢川玉海つる志のまげり重り哉 涼花
 休らふも人又昨のほく歳なり 菜香
 井を酒と人をもをそそぐ 撒の香 白起
 蘇るのたふ子供の喜や撒の花 涼香
 ちり梅を志のりもちや合歡の香 秋之
 小流石よ汐時まらや撒し船 山歌
 向のりや歳を暮るの香 秋の香 月夕
 村中ありのりてあり合歡の香 氣友
 日暮をそそぐを暮るの香 乙良
 菱花のまじりんや秋の香 秋之権
 伐のりてそそぐを暮るの香 由樂

麻川

麻川てよまのまりもをまらう乳 瓦村
 麻のりや漸くそそぐのり 田子
 秋の香や登橋まらて川は香 波路
 ちり梅のりもちり小流のり 秋之
 州をて休むや麻のり自ひ 花外
 蘇るのりひし、麻のり 夜夢
 麻川て休むもを暮るのり 秋之
 まきらうそそぐのりや一担酒 秋之
 道のりは飲りりちり 秋之
 およそそそぐを暮るのり 秋之
 一担酒を夜泊りや 秋之

一夜酒

龜の子

香濱ののむらみ来りり岩の分、龜遊
何を海や松のうけらるる岩を笠 南樓
そらよおとよ言渡りし言をき 花外
うらゆるや湖の船乃ニ高植 祖師
麓のふや水はく池の友をき 月夕
船木たや麓をまきお船の舟の 巖山
うたれまや春水川をき 晴花
かうのや春水まきうの川のは 珠石
麓のふや草のうらむて 三石
うたれまや月をき 花をき 之四
岩のふを海のうらむ 風をき 由美

御後

おとよきみすや御後のまをむらみ 杉峯
山川やまきまをきぬ洗ゆらぬ
まをきみ、おとよをがらそ御後代 杉谷
おとよのまをきまをきや御後川 對浦
ひらきと海のまをきぬ御後川 岡田
神風とす、まをきぬ御後川 一丸
橋をり、仲とありたり、又まき川 兼冬
川をき、おとよ御後まをきたり 秋之

Handwritten text in a cursive script, likely a list or account, written in dark ink on aged paper. The text is arranged in several lines, starting with a vertical column of characters on the left side of the page. The script is dense and difficult to decipher due to its cursive nature and the fading of the ink.

14

